



鳥取県八頭郡郡家町

万代寺遺跡発掘調査報告書

県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴う

埋蔵文化財試掘調査

1982.3.20

郡家町教育委員会

序

昨今、文化財保護の重要性が広く認識され、各地で保護運動と保護のため具体的な処置が講じられていますが、郡家町にも古墳群が多数散在し、その保護に重大な关心を寄せるとともに、文化財保護の意識高揚に最善の努力を払っているところです。

このたびの万代寺遺跡発掘調査は、昭和57年度実施予定の県営八頭中央地区は場整備事業に伴うもので、は場整備事業の円滑な進捗を図るため、緊急に遺跡の確認のための試掘調査を実施したものであります。

この万代寺遺跡は、万代寺部落に接する標高約47メートルの丘陵地に位置し、13ヘクタールにおよぶ水田地帯であります。

この一帯は黒ばこ土で、元禄14年頃畠地として開墾され、更に明治15年頃用水路の開通とともに新田開発が行なわれたと言われています。

今回の試掘は、この地域一帯から須恵器、土師器の破片が露出し、地形的に見ても古代の住居跡が埋蔵されている可能性が強く、実施いたしましたが、試掘の結果は丘陵地帯全面から予想のとおりの生活跡とみわれる柱穴、側溝跡らしきものが発見され、きわめて短期間のうちに所期の目的を達成することができました。

このたびの調査は、トレンチ方式によるもので、32カ所のトレンチを設け、昭和56年11月24日から昭和56年12月26日までに延べ175人役の手作業によって実施いたしました。

本調査の実施にあたり、直接調査に参画していただきました方々、また、常に適切な御指導にあたっていただきました県職員の方々、さらに、八頭中央土地改良区と関係農家の方々の厚い御理解、御協力に対しまして深く感謝と敬意を表します。

昭和57年3月20日

郡家町教育委員会教育長 北村一利

例　　言

1. この冊子は、県営八頭中央地区は場整備事業に伴う、万代寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は郡家町教育委員会が主体となり、県教育委員会文化課の御指導をうけて実施し、昭和56年11月24日から昭和56年12月26日までを発掘調査、昭和56年12月27日から昭和57年3月20日までを整理期間とした。
3. 方位は磁北をさす。

調査団名簿

調査團長 北村 一利 (郡家町教育委員会教育長)
調査員 三木 薫 (郡家町文化財保護審議委員)
調査指導 鳥取県教育委員会文化課
事務担当 丸山 勉 (郡家町教育委員会社会教育主事)
調査協力 波多野 俊爾 (八頭中央土地改良区理事長)
作業員 林 利喜藏 林 致朗 林 政敏
井上 義則 西尾 長藏 西尾 耕
中村 賢治 前田 浩治 衣笠 諭志
坂本 明裕 松田 かず子 中本 美智子
大野 和江 宮田 芳子 宮田 豊子
三好 民恵 田中 愛子 山本 智恵子

本文目次

第1章 発掘調査に至る経過.....	1
第2章 万代寺遺跡周辺の歴史的環境.....	2
第3章 調査の概要.....	4
第1, 第2, 第3, 第4, 第5, 第6トレンチ.....	4
第7, 第8, 第9, 第10, 第11, 第12, 第13, 第14, 第15, 第16トレンチ.....	5
第17, 第18, 第19, 第20, 第21, 第22, 第23, 第24, 第25, 第26トレンチ.....	6
第27, 第28, 第29, 第30, 第31, 第32トレンチ.....	7
第4章 出土遺物.....	16
弥生土器.....	16
古墳時代の土師器.....	16
古墳時代の須恵器.....	16
奈良・平安時代の土器.....	18
第5章 まとめ.....	19

挿 図 目 次

図版1 万代寺遺跡周辺遺跡位置図.....	3
2 トレンチ位置図.....	8
3 第1・2・3トレンチ実測図.....	9
4 第4・5・6 タ.....	10
5 第8・9・13 タ.....	11
6 第17・18・19 タ.....	12
7 第20・21・22 タ.....	13
8 第25・26・27 タ.....	14
9 第30・31 タ.....	15
10 弥生土器・古墳時代の土師器実測図.....	17
11 古墳時代の須恵器、奈良・平安時代の土器実測図.....	18

写 真

1. 万代寺遺跡全景（北から）.....	1
2. 第1・第2・第3・第4トレンチ.....	20
3. 第5・第6・第8・第9トレンチ.....	21
4. 第13・第17・第18・第19トレンチ.....	22
5. 第20・第21・第22・第25トレンチ.....	23
6. 第26・第27・第30・第31トレンチ.....	25
7. 出 土 遺 物.....	25

第1章 発掘調査に至る経過

郡家町では、農業経営の近代化を図るため、年次ごとには場整備事業が実施されている。

このたび、昭和57年度に、ほ場整備事業が実施予定されている範囲内で、以前から土器片等の出土が見られ、遺跡が存在する可能性の強いことは知られていた。

このため関係諸機関と協議を重ね、昭和56年9月頃現地踏査をした結果、丘陵一帯に土器器片、須恵器片が散布しており、緊急に試掘調査を実施することになった。

昭和56年11月から12月にかけて試掘調査を実施したところ、柱穴等が確認され、丘陵一帯に生活跡が存在していたことが判明した。



写真1. 万代寺遺跡全景(北から)

第2章 万代寺遺跡周辺の歴史的環境

万代寺遺跡は、鳥取県立八頭高等学校から西南の万代寺集落側へのびる低丘陵上に立地し、近くには八東川と私都川の合流点がある。このあたりは、古代律令制度下の因幡國八上郡に属し、現在の行政区画では八頭郡郡家町・河原町及び船岡町が隣り合っている。

本遺跡の周辺で、最も古く人々が生活したところは未だ明確ではないが、石鎚・打製石斧・石錐・石ヒ・土器など各種の縄文時代遺物を出土した、郡家町西側門遺跡（後期）が一つの候補地として挙げられる。

これは、昭和43年に発見された自然堤防上の遺跡で、その後帝塚山大学によって発掘調査されたが、小範囲の発掘で建物造構の検出には至らなかった。これを除けば他は打製石斧（河原町佐貫）の出土地のみで、時期の判明する縄文遺跡は知られていない。

河川の氾濫による被害の少ない、山麓とか低丘陵・微高地などが、稻作を生活の基盤とする弥生人の生活の舞台となったが、この時代の代表的遺物である銅鐸が、郡家町下坂と船岡町破岩で発見されている。前者は袈裟櫛文で飾られ、後者は身に突線を有する県下最大の銅鐸である。これらの祭器を用いて農耕儀礼を執り行った共同体については、まだ十分解明されていない。

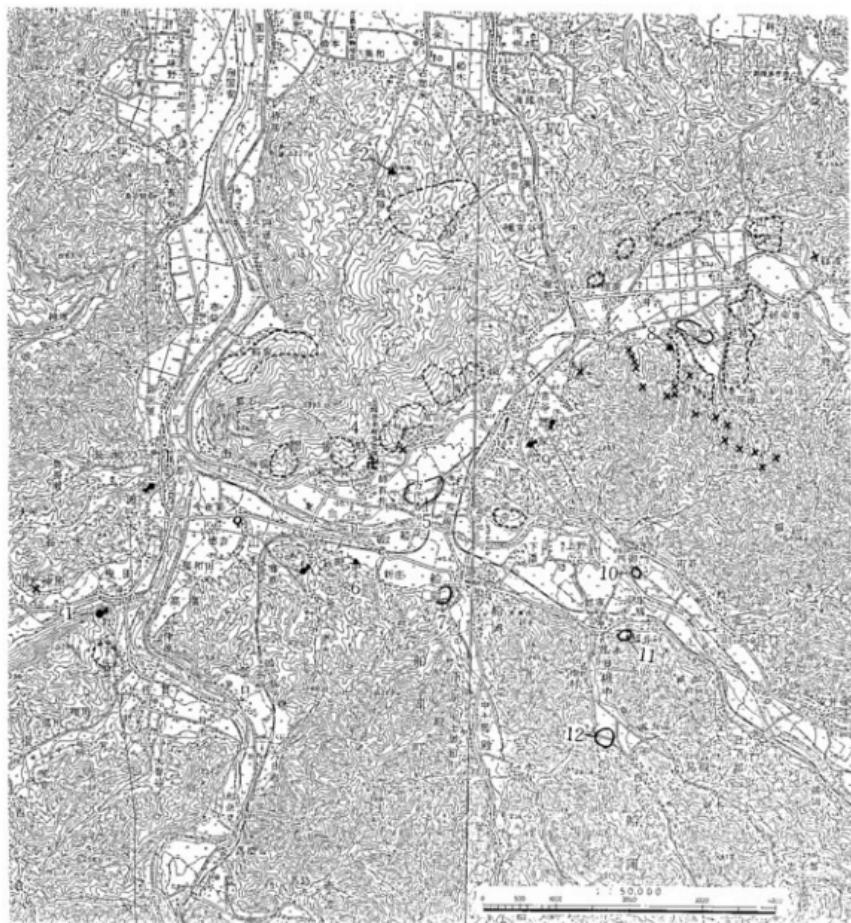
弥生文化に関する従来の資料では、河原町今在家の弥生土器（中期）・郡家町土師百井・上峰寺・花原の太型蛤刃石斧・上津黒の石庖丁が分っている程度であった。昭和56年10月、八東町安井宿字松ノ木前で磨製石斧が出土し、さらに最近の発掘調査で、船岡町牧野遺跡で弥生土器が認められたほか、西ノ岡遺跡で後期～終末期の堅穴住居跡が、また丸山遺跡では、堅穴住居跡・中期の土器・分銅形土製品・柱状片刃石斧・抉入石斧・石庖丁等が発見され、若干ムラの様相が究明されはじめている。

さて、共同体内部の階級分化が進み、支配者とかか有力家父長層の死に際して、隆然たる封土と豊富な副葬品を持つ立派な高塚墳墓を造った古墳時代に入ると、この付近にも多くの古墳が築造されている。丸山遺跡で見つかった大量の埴輪を伴う構構が古墳になれば、全長67mで八頭郡最大となるが、眼下、一番大きい曳田の獄古墳（全長50m）を筆頭に、渡一木・郷原・郡家・宮谷・山路などに小型前方後円墳が出現する。そして、溶岩台地である蓋石山の支脈上には、稻常・米岡・池田・土師百井・福本地内に、横穴式石室を内部主体とする群集墳が分布している。

これらの古墳群中には、米岡2号墳・福本4号墳など4基の線刻壁画古墳が含まれていて、埋葬儀礼上注目される。私都谷の入口付近にも円墳群が稠密に認められ、破壊された山田地内の集落推定地との関連が考えられる。

歴史時代の遺構・遺物が検出された遺跡としては、法起寺式伽藍配置をもつ国史跡土師百井廃寺跡・掘立柱建物跡の出た西ノ岡遺跡があり、河原町牛ノ戸・天神原・郡家町山田・下坂・花原では須恵器の窯跡が、奥谷・池田・下坂では瓦の窯跡が知られていて、県内最大の窯業地帯であったことを窺わせる。

万代寺遺跡は、このような歴史的環境の中に位置しているが、今回の調査によりこの地が、弥生時代以来長く人々との係わりをもつ場所であったことが、次第に明らかになりつつある。



凡 例

- 散布地・集落跡
- ▲ 銅鐸出土地
- 古 墳 群
- 前方後円墳
- × 窯 跡

- | | |
|----------------------------|------------------|
| 1. 獄 古 墳 | 7. 丸 山 遺 跡 |
| 2. 米 里 銅 鐸 出 土 地 | 8. 下 坂 銅 鐸 出 土 地 |
| 3. 空 山 古 墳 群 | 9. 寺 山 古 墳 |
| 4. 土 師 百 井 棲 寺 遺 跡 | 10. 西 御 門 遺 跡 |
| 5. 万 代 寺 遺 跡 | 11. 西 ノ 岡 遺 跡 |
| 6. 破 岩 銅 鐸 出 土 地
(位置不詳) | 12. 牧 野 遺 跡 |

図版1 万代寺遺跡周辺遺跡位置図

第3章 調査の概要

発掘調査は、タバコの作付が行なわれる場所、ほ場整備区域内で、削平計画が予想される場所等を中心実施した。2m×10mのトレンチを32本設定し、その概要は以下のとくである。

なお、調査期間等の制約があり、造構の完掘は行なわなかった。

第1トレンチ（図版3、写真2）

ピットは8個（P1～P8）を検出した。その径は20cm～30cm程度である。P1～P3は柱すじを同じくし、N-16°-Eの方位をとり、掘立柱建物跡と考えられる。柱間はP1～P2 130cm、P2～P3は120cmである。遺物は検出されなかった。

第2トレンチ（図版3、写真2）

ピットは9個（P1～P9）を検出した。その径は20cm～30cm程度のものが5個、50cm～80cm程度のものが4個である。P1～P2、P3～P5は柱すじを同じくし、N-17°-Eの方位をとり、規模の大きな掘立柱建物跡と考えられる。柱間はP1～P2は158cm、P3～P4は128cm、P4～P5は125cmである。

第3トレンチ（図版3、写真2）

ピットは2個（P1、P2）を検出した。その径は20cmと41cmとである。土塁墓跡？長径204cm、短径86cmを検出し、また、トレンチ中央部分の東側にも同様なものを検出した。遺物は検出されなかった。

第4トレンチ（図版4、写真2）

ピットは2個（P1、P2）を検出した。その径は41cmと40cmとである。トレンチ中央部に走る、幅140cm～170cmの溝を検出した。また、半円、台形の造構も検出した。

第5トレンチ（図版4、写真3）

ピットは7個（P1～P7）を検出した。その径は30cm～50cm程度のものが5個、100cm前後のものが2個である。後者のピットは、第2トレンチで検出している、大型の柱穴に類似する。P1～P4は柱すじを同じくし、N-11°-Eの方位をとり、掘立柱建物跡と考えられる。トレンチ南部で東西に走る溝を二本検出した。完掘していないため、その新旧はさだかでない。遺物は検出されなかった。

第6トレンチ（図版4、写真3）

ピットは8個（P1～P8）を検出した。その径は50cm～80cm程度のものが7個、21cmのものが1個である。P1～P4は柱すじを同じくし、ほぼ磁北と一致しており、規模の大きい掘立柱建物跡と考え

られる。その様相は第2トレンチで検出しているものに類似する。柱間はP 1～P 2は256cm、P 2～P 3は262cm、P 3～P 4は210cmである。また、トレンチ中央部から幅100cmの溝を検出した。遺物は検出されなかった。

第7トレンチ

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第8トレンチ（図版5、写真3）

ピットは1個（P 1）を検出した。その径は26cmである。

第9トレンチ（図版5、写真3）

ピットは1個（P 1）を検出した。その径は90cmである。

第10トレンチ

遺構は検出されなかった。

第11トレンチ

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第12トレンチ

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第13トレンチ（図版5、写真4）

ピットは1個（P 1）を検出した。その径は45cmである。そのピットに接し、不整形な落ちこみを検出した。トレンチ中央部からほぼ東西に走る幅160cm程度の溝を検出した。遺物は検出されなかった。

第14トレンチ

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第15トレンチ

遺構は検出されなかった。

第16トレンチ

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第17トレンチ（図版6、写真4）

遺構、遺物ともに検出されなかった。

第18トレンチ（図版6、写真4）

ピットは2個（P1・P2）を検出した。その径はP1は長径31cm、短径18cm、P2は24cm、19cmの方形である。遺物は検出されなかった。

第19トレンチ（図版6、写真4）

ピットは7個（P1～P7）を検出した。その径は20cm～40cm程度のものである。P1～P4は柱すじを同じくし、N-85°-Wの方位をとり、掘立柱建物跡と考えられる。柱間はP1～P2は86cm、P2～P3は106cm、P3～P4は106cmである。

遺物は検出されなかった。

第20トレンチ（図版7、写真5）

ピットは1個（P1）を検出した。遺物は検出されなかった。

第21トレンチ（図版7、写真5）

ピットは1個（P1）を検出した。その径は21cmである。遺物は検出されなかった。

第22トレンチ（図版7、写真5）

ピットは1個（P1）を検出した。その径は32cmである。遺物は検出されなかった。

第23トレンチ

遺構は検出されなかった。

第24トレンチ

トレンチ一面で玉敷状のものを検出したが、一部掘りさげて調査した結果、遺構に伴うようなものではない。遺構、遺物とも検出されなかった。

第25トレンチ（図版8、写真5）

ピットは2個（P1～P2）を検出した。その径は30cm程度である。遺物は検出されなかった。

第26トレンチ（図版8、写真6）

ピットは6個（P1～P6）を検出した。その径は20cm程度のものが3個、30cm程度のものが2個、50cmのものが1個である。遺物は検出されなかった。

第27トレンチ（図版8、写真6）

ピットは7個（P 1～P 7）を検出した。その径は20cm～25cm程度である。遺物は検出されなかつた。

第28トレンチ

遺構、遺物とも検出されなかつた。

第29トレンチ

遺構、遺物とも検出されなかつた。

第30トレンチ（図版9、写真6）

ピットは5個（P 1～P 5）を検出した。その径は15cm～20cm程度である。P 1～P 3の柱すじは少しづれるが、柱穴内には土器片が混入しており、掘立柱建物跡と考えられる。遺物は検出されなかつた。

第31トレンチ（図版9、写真6）

ピットは3個（P 1～P 3）を検出した。その径は長径39cm、短径28cmの半梢円形のものが1個。31cm、20cmのものが各一個づつである。
遺物は検出されなかつた。

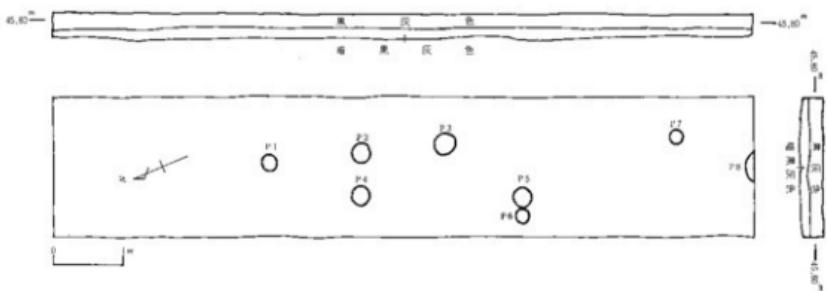
第32トレンチ

遺構、遺物とも検出されなかつた。

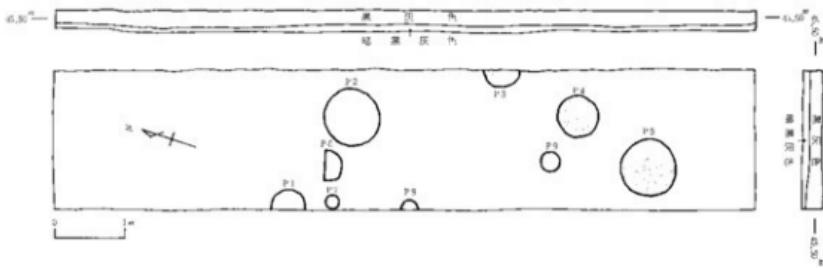


図版2 トレンチ位置図

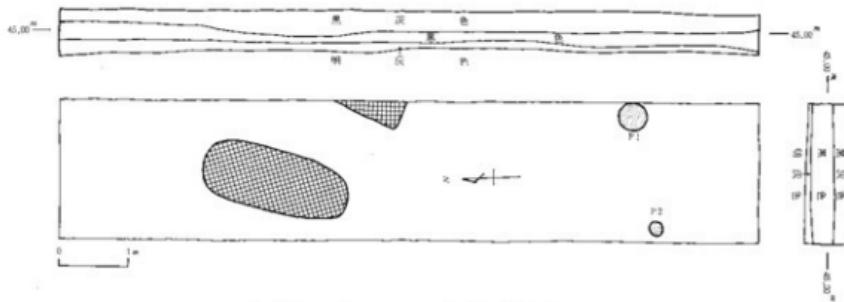
第1トレンチ



第2トレンチ

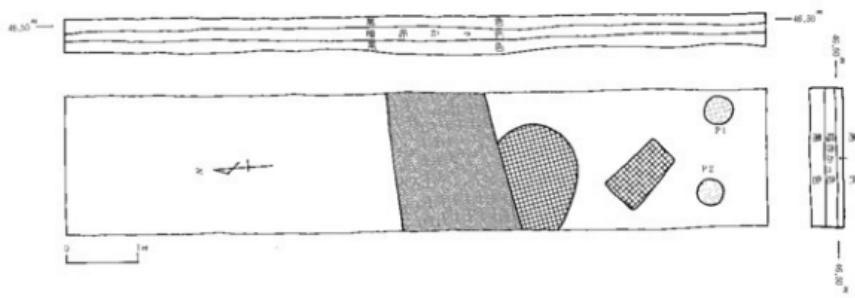


第3トレンチ

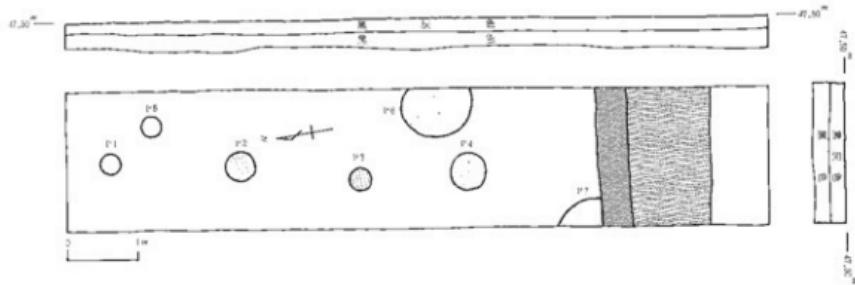


図版3 トレンチ実測図

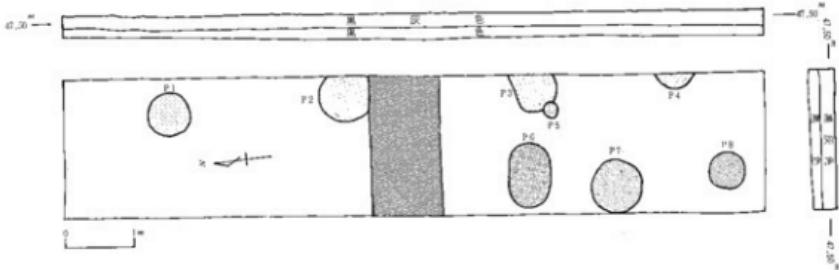
第4 トレンチ



第5 トレンチ

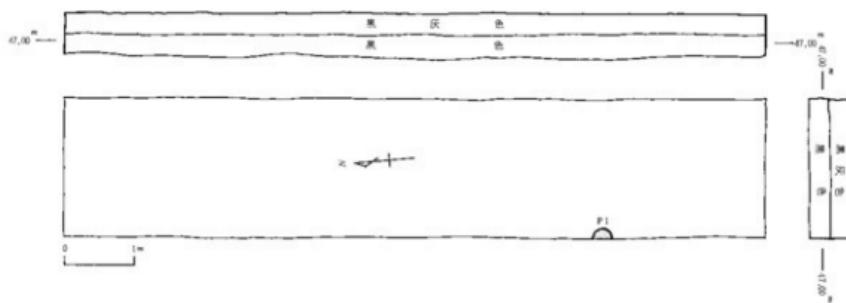


第6 トレンチ

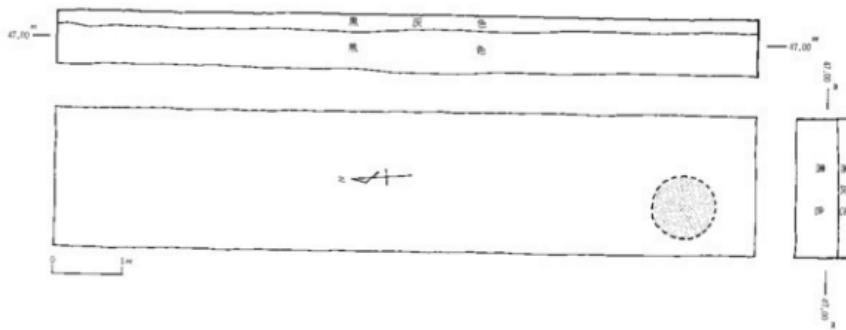


図版4 トレンチ実測図

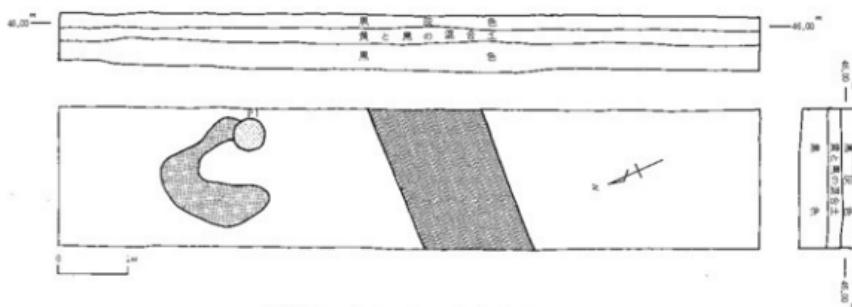
第8トレンチ



第9トレンチ

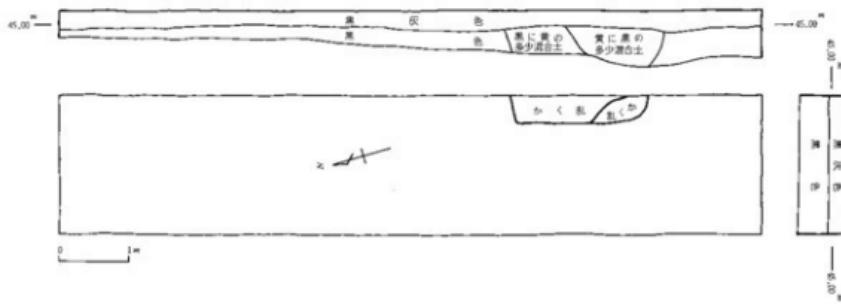


第13トレンチ

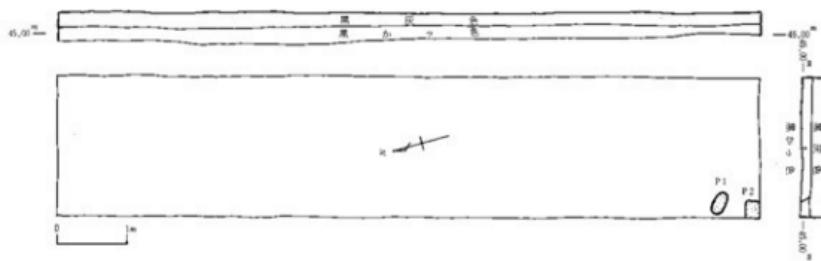


図版5 トレンチ実測図

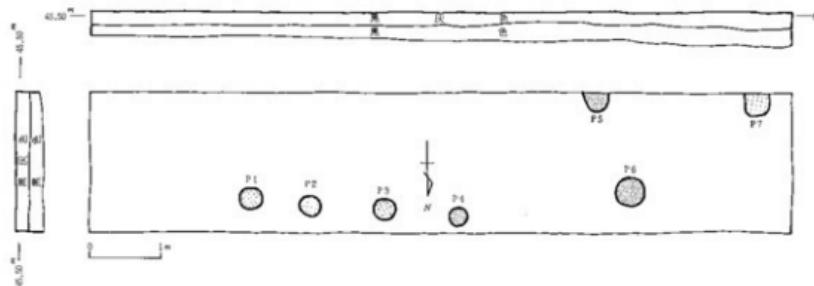
第17トレーニチ



第18トレーニチ

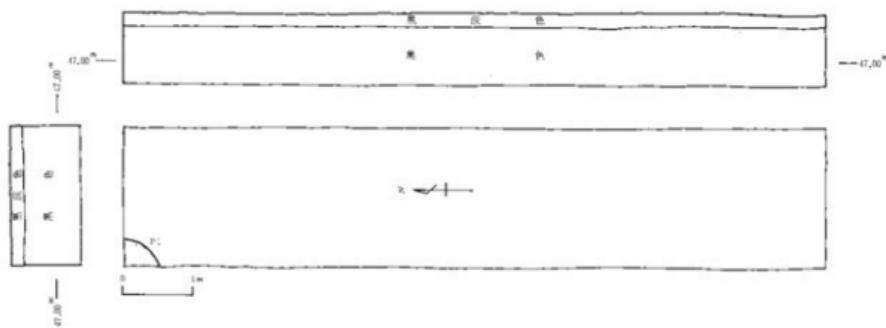


第19トレーニチ

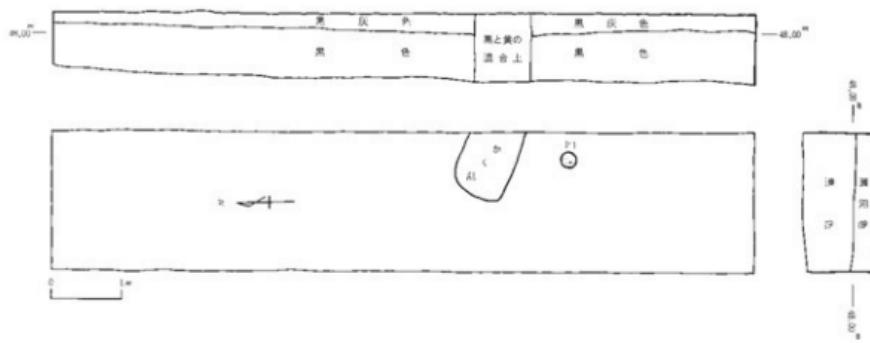


図版6 トレーニチ実測図

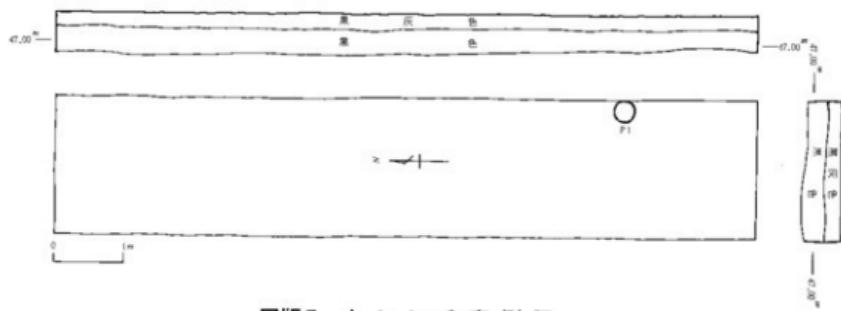
第20トレンチ



第21トレンチ

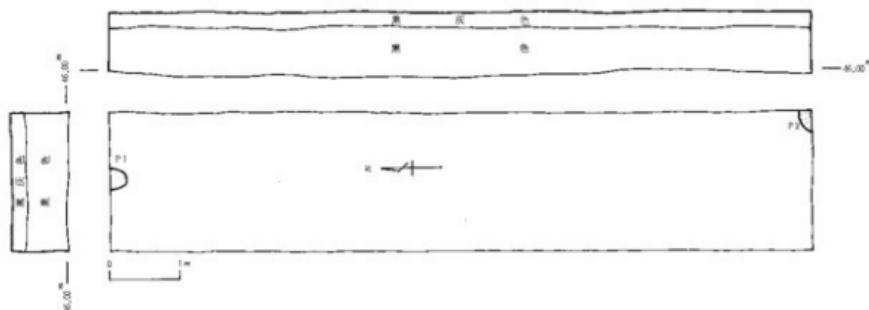


第22トレンチ

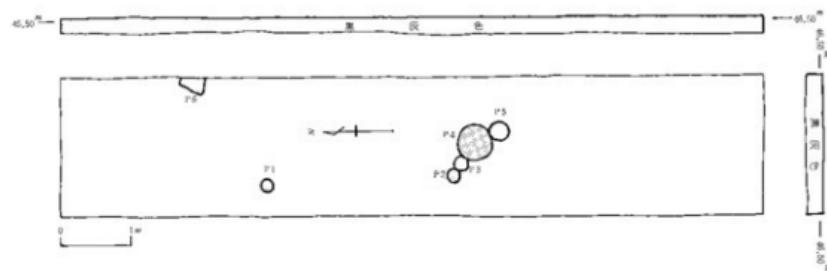


図版7 トレンチ実測図

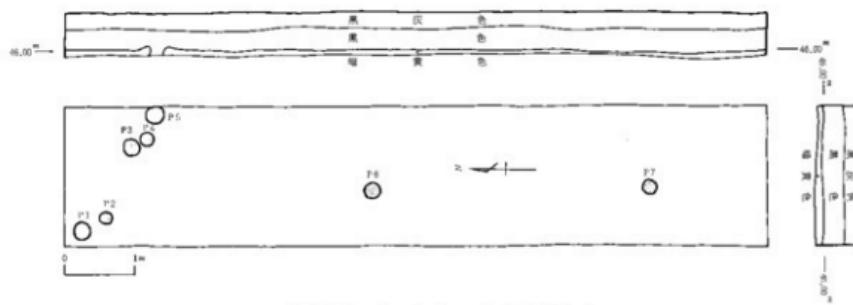
第25トレンチ



第26トレンチ

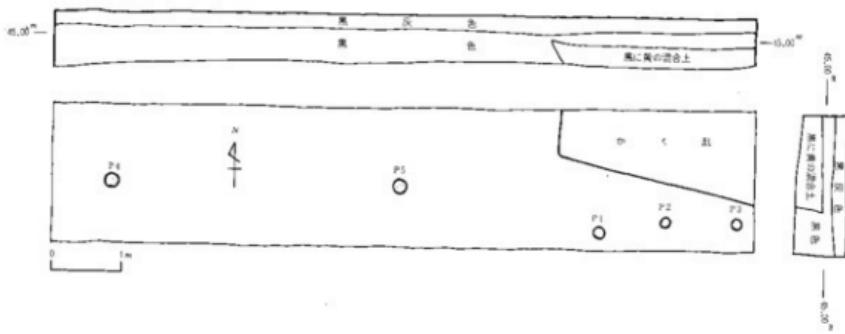


第27トレンチ

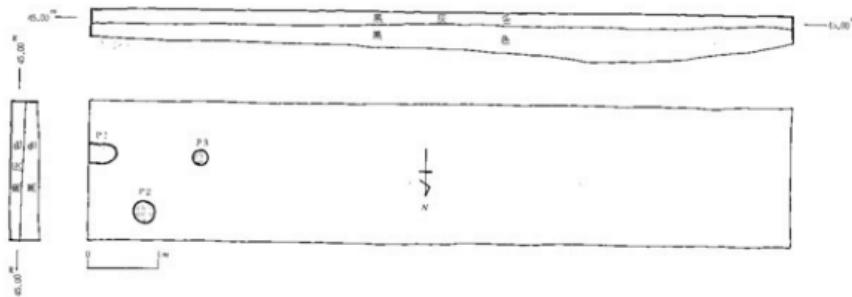


図版8 トレンチ実測図

第30トレンチ



第31トレンチ



図版9 トレンチ実測図

第4章 出土遺物

今回の調査に伴う出土遺物は、遺構を完掘していないため、極めて少なく、総数111片であった。その内訳は、弥生土器44片、古墳時代の土師器38片、古墳時代の須恵器27片、奈良から平安時代の土器2片である。これらの出土遺物は、おのずと万代寺遺跡の時代巾を示しているものと考けられる。概要是以下のとくである。

弥生土器（図版10—1～12、写真7—上）

図示できるものは12点であった。器種は甕（1～5・7・8）、壺（6）・鉢（9）・高杯（10）などである。

甕 1～5は頸部が「く」の字状に屈曲し、口唇部が肥厚するもの（3～5）と、しないもの（1・2）に分けられる。4は端部にキザミメをもつ。これらな頸部から口縁部にかけて、内外面を横ナデにし、頸部以下の内外面をハケメ整形する。中期中葉頃のものであろう。1・3はT—4出土、2・5はT—4出土。口径、1は17.5cm、2は19.5cm、3は16.0cm、4は23.5cm、5は21.5cm。

7・8は、複合口縁を有するもので、口縁部外面に平行沈線を施す。頸部内面以ドヘラ削りする。後期終末頃のものであろう。口径、7は18.0cm、T—9出土。口径、8は18.5cm、T—2出土。

壺 6は頸部にネクタイ状の突帯をもつもので、頸部以下内外面をハケメ整形する。中期中葉頃のものであろう。T—10出土。

鉢 9は頸部を「く」の字状に屈曲し、内外面をハケメ整形する。中期中葉頃のものであろうか？口径21.5cm、T—4出土。

高杯 10は脚部の破片で、外面にハケメが残る。裾部径8.8cm、T—4出土。

古墳時代の土師器（図版10—13～15、写真7—下）

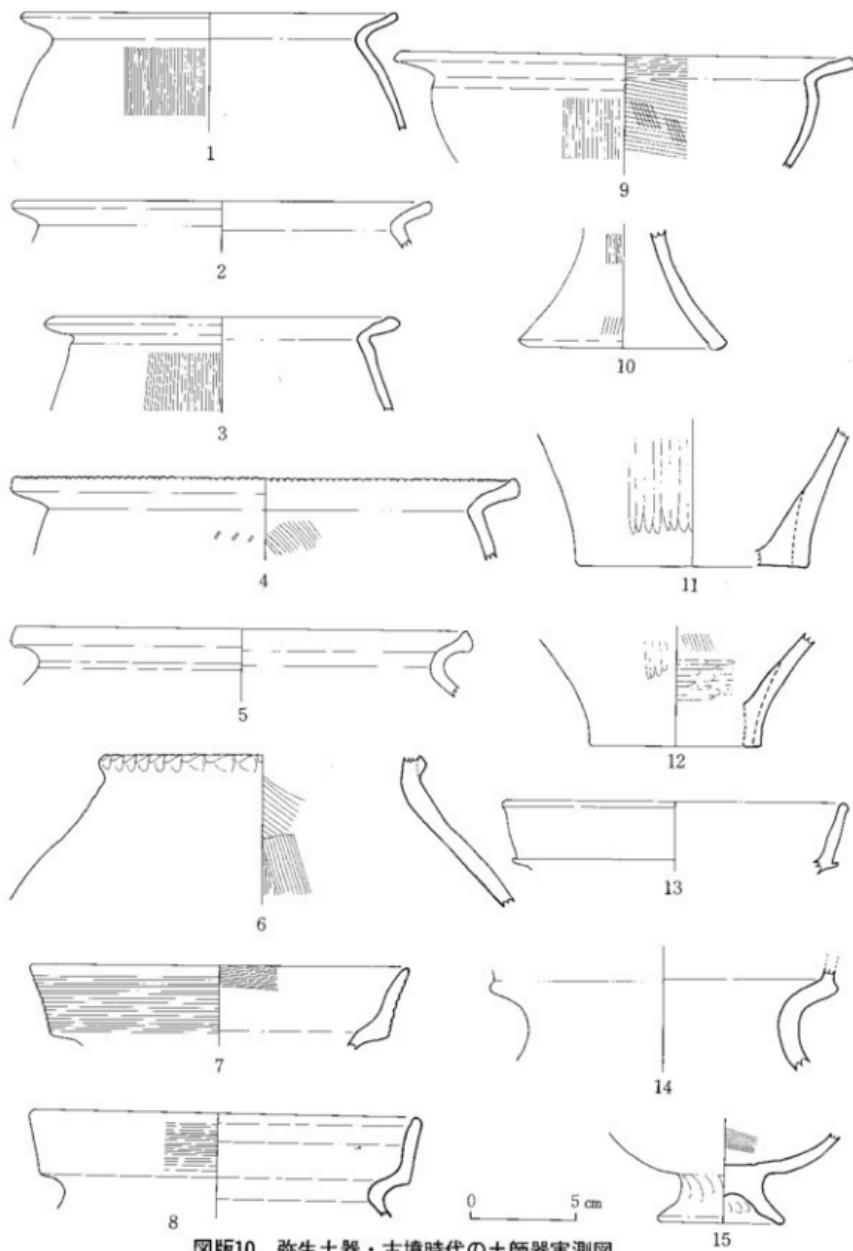
図示できるものは3点で、甕（13）・壺（14）・低脚杯（15）の器種がみられた。古墳時代前期から中期初頭頃のものであろう。

甕 13は複合口縁で、口縁部の屈曲部を横ナデによって上方に引き出し、口縁部内外面を横ナデする。口径16.0cm、T—9出土。

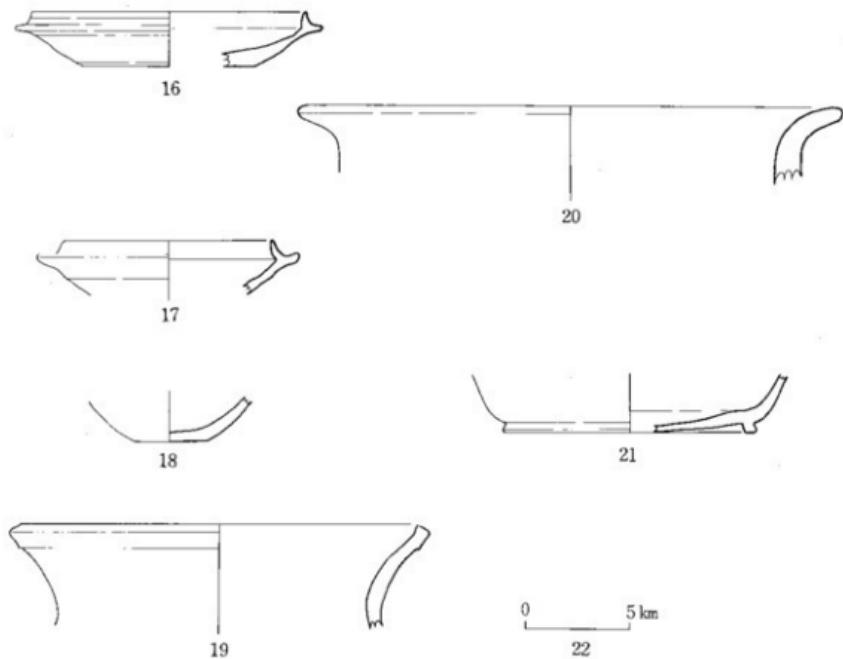
壺 14は頸部が長く、口縁屈曲部を水平方向に引き出そうとするが、接線をもたない。T—10出土
低脚杯 15は底部内面をラセン状にハケメ整形する。脚部内面に指圧痕を残す。T—23出土。

古墳時代の須恵器（図版11—16～19、写真7—下）

図示できるものは4点で、壺身（16～18）甕（19）の器種がみられた。これらはT—15からまとまって出土しており、古墳の副葬品であったと推定される。六世紀後半頃のものであろう。



図版10 弥生土器・古墳時代の土師器実測図



図版11 古墳時代の須恵器、奈良・平安時代の土器実測図

壺身 立ち上がりは短かく内傾する。受部を水平方向に引き出すもの（16）と、上方に引き出すもの（17）がみられる。18は底部をへら切りする。口径、16は13cm、17は10cm、18は底径3.5cm。

甕 19はラッパ状に開く口縁部をもち、口縁部端部外面に段を有する。口径18.8cm、

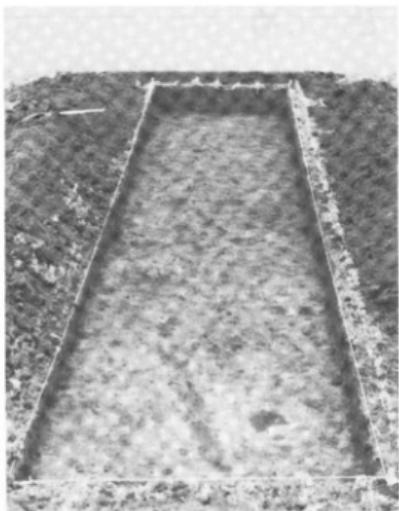
奈良・平安時代の土器（図版11-20・21、写真7一下）

図示できるものは2点で、土師器の甕（20）・壺（21）の器種がみられた。20は奈良時代のものと考えられ、口径25.5cm、T-23出土。②は平安時代初頭頃のもので、私都古窯址群の製品である。底径12.0cm、T-4出土。

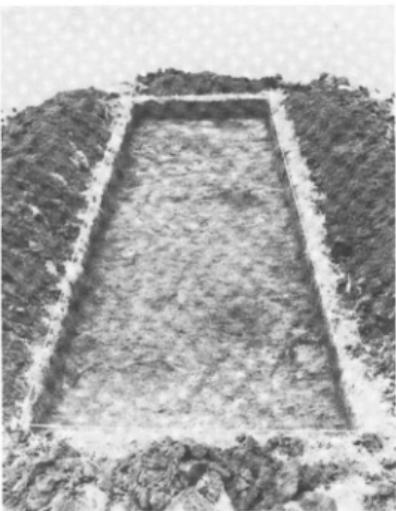
第5章 ま　と　め

今回の発掘調査は調査期間 等に制約があったため、詳細な遺構検出までには至らなかった。しかし、それなりの成果が得られており、今後の調査へ示唆するものも多いので、調査の結果を大まかにまとめるところとなろう。

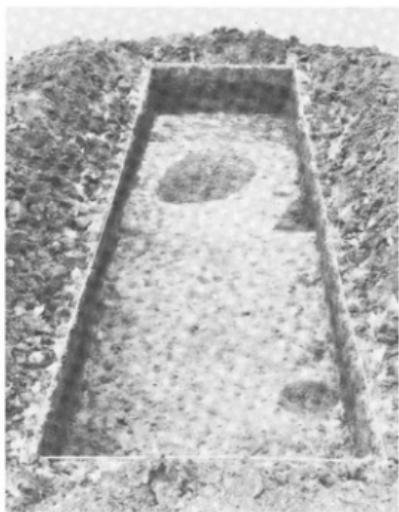
- (イ) 弥生時代中頃から平安時代初頭頃までの遺物が出土しており、この台地は弥生時代から平安時代に及ぶ複合遺跡である。
- (ロ) 検出された遺構には、掘立柱建物・溝・土括築（？）等がある。また、T-15付近には古墳の石室等に使用されたと思われる板状の石材が存在することや、六世紀後半頃の須恵器がまとまって出土していることなどから封土を失った古墳が存在していると考えられる。
なお、北側地区（T-2・T-4～T-6）では、官衙遺跡等で見られる大型の掘立柱建物跡が検出されており、今後の発掘調査に期待したい。



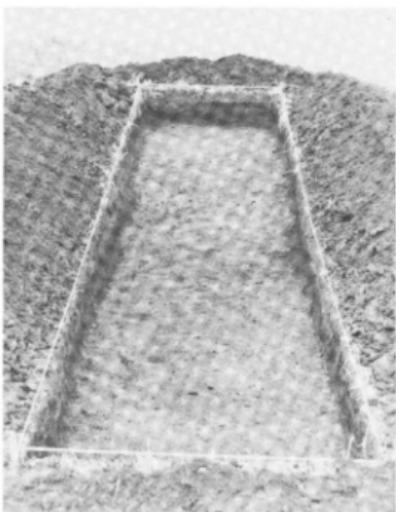
第1トレンチ（北から）



第2トレンチ（南から）

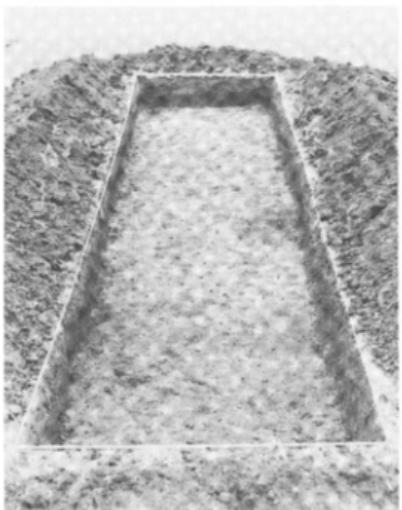


第3トレンチ（南から）

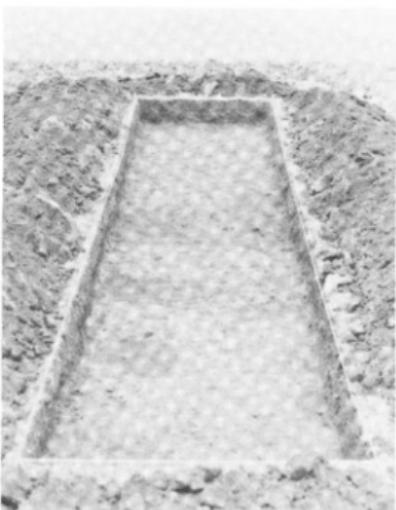


第4トレンチ（南から）

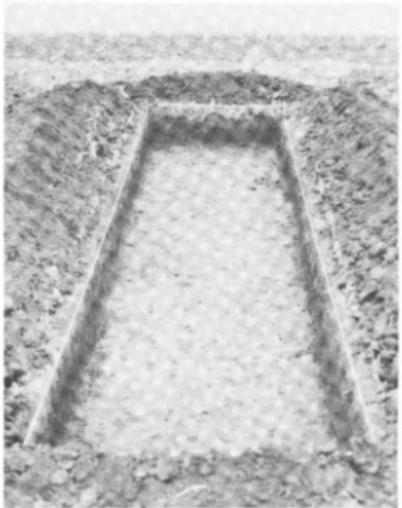
写真2 第1, 第2, 第3, 第4トレンチ



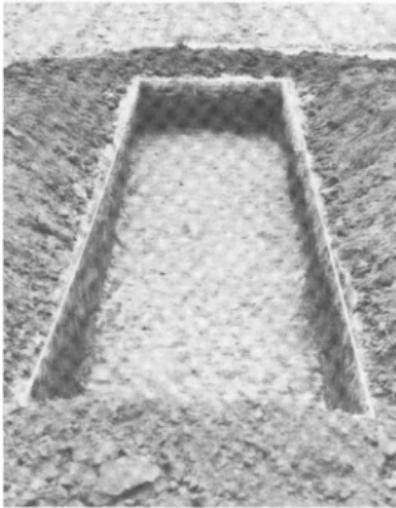
第5トレンチ（南から）



第6トレンチ（南から）



第8トレンチ（北から）



第9トレンチ（北から）

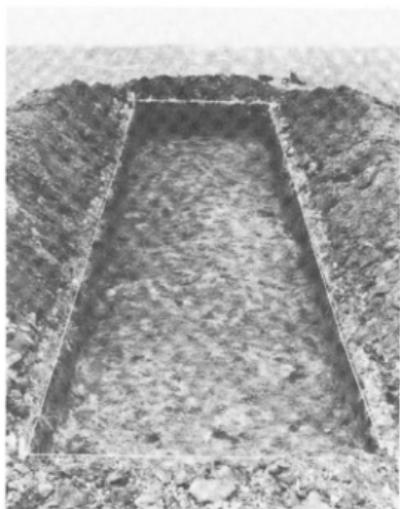
写真3 第5, 第6, 第8, 第9トレンチ



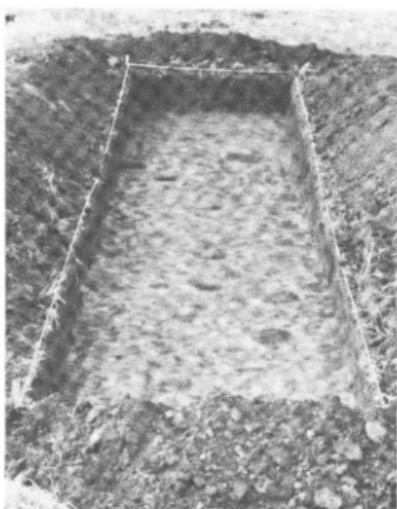
第13トレンチ（南から）



第17トレンチ（南から）

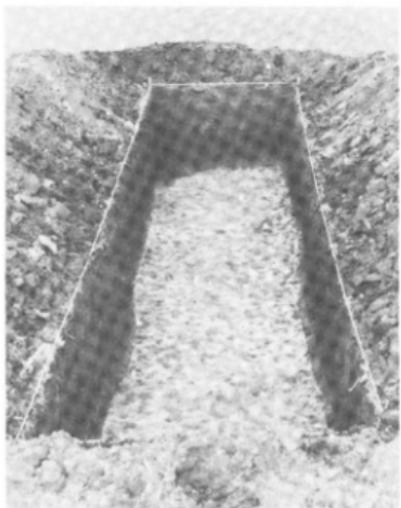


第18トレンチ（北から）

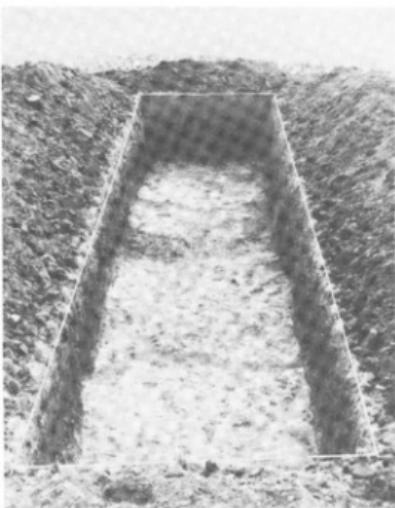


第19トレンチ（東から）

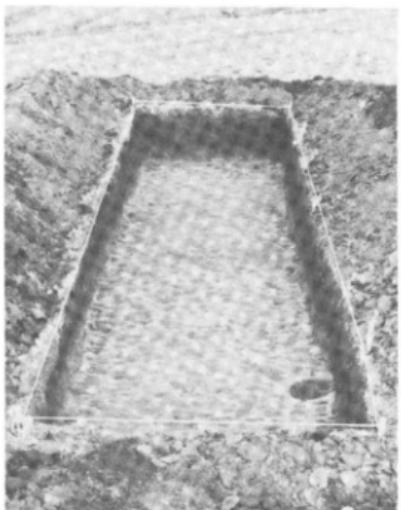
写真4 第13, 第17, 第18, 第19トレンチ



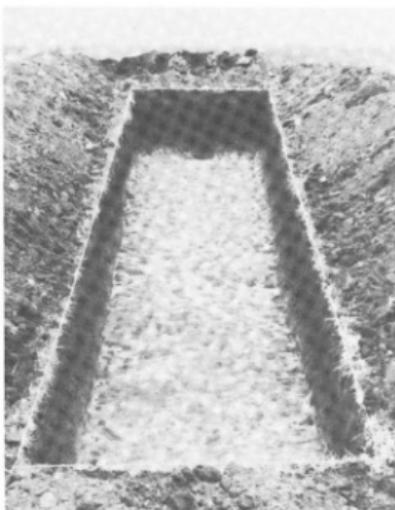
第20トレンチ（南から）



第21トレンチ（南から）

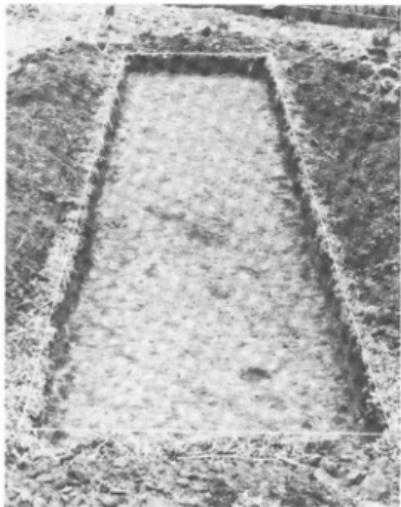


第22トレンチ（南から）

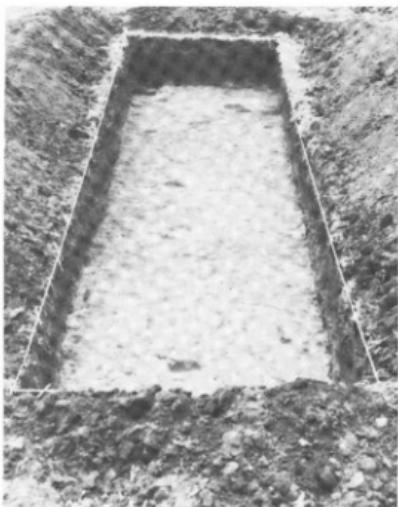


第25トレンチ（南から）

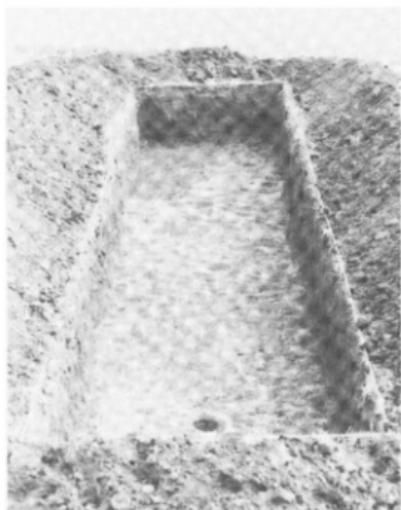
写真5 第20, 第1, 第22, 第25トレンチ



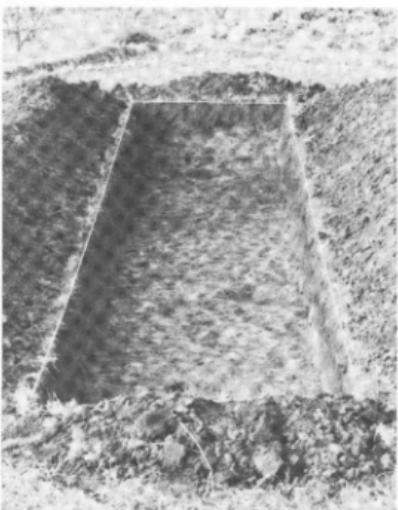
第26トレンチ（北から）



第27トレンチ（南から）



第30トレンチ（西から）



第31トレンチ（西から）

写真6 第26, 第27, 第30, 第31トレンチ

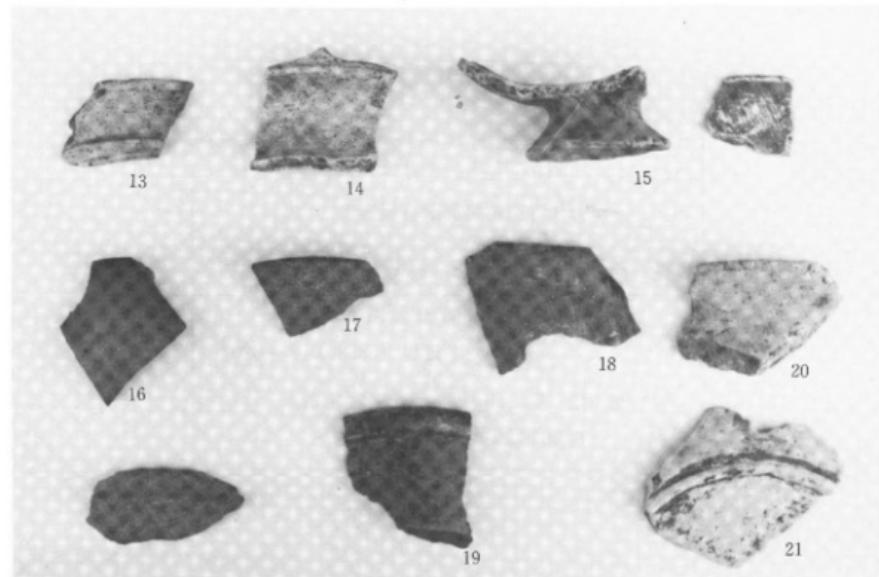
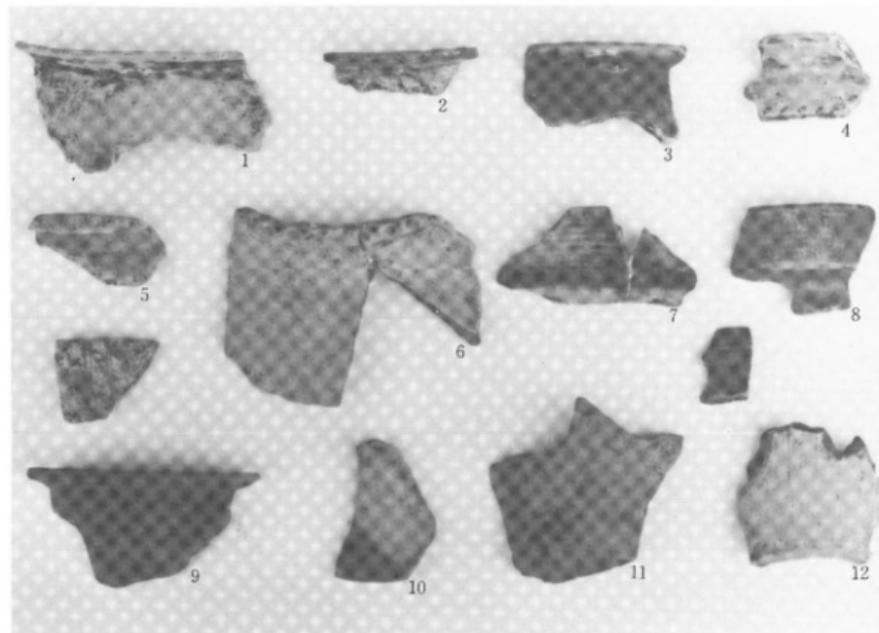


写真7上・下 出土遺物

昭和57年3月発行

万代寺遺跡発掘調査報告書

発行/郡家町教育委員会

鳥取県八頭郡郡家町大字郡家493

TEL (08587) 2-0201

印刷/松島印刷所

八頭郡郡家町郡家